焦菊隱

「演出家・作家・作品」解説

焦菊隱（Jiao Juyin しょう・きくいん）は中国を代表する話劇劇団である北京人民芸術劇院第一副院長、総導演（首席演出家）の職にあり、北京人民芸術劇院の作風の基礎を固めた人である。彼の演出の代表作には老舍『龍鬚溝』、郭沫若『虎符』、老舍『茶館』、郭沫若『蔡文姬』などがあり、なかでも『茶館』は今日まで繰り返し再演され、外国でも何度も上演されて高い評価を受け、中国話劇の代表作の一つとみなされている。文化大革命終結後の日本で中国話劇に対する関心が高まりだしたのも、1983年の『茶館』訪日公演以後のことである。

焦菊隱の演出理論の基礎にはスタニスラフスキー・システムに基づくリアリズムの演劇理論がある。しかし、中国では焦菊隱の功績として、単にスタニスラフスキー・システムの紹介、消化にとどまらず、中国伝統演劇（戯曲）に学びその技法や精神を話劇の上演に生かす「話劇の民族化」を提起し実行したことが強調されている。

焦菊隱は1905年12月11日に天津に生まれた。本名は焦承志。1924年秋に燕京大学政治系に入学した。大学入学前後から詩を書きはじめ、詩人としてもある程度は名を知られた。卒業後は北平私立二中の校長などを務め、1931年9月に国民党幹部の委託を受けて中華戯曲専科学校を設立、その初代校長になった。ここで焦菊隱は中国伝統演劇に広く触れた。

35年、中華戯曲専科学校を離れ、同年九月焦菊隱はパリ大学に留学、38年には博士の学位を取得した。学位論文は二十世紀の中国で上演される伝統演劇を中心に分析した『今日の中国演劇』である。

その後抗日戦争に触発され中国に帰国し、広西大学、国立戯曲専科学校などに勤務した。抗日戦争期の焦菊隱は概して不遇であった。しかしこの時期にダンチェンコ『文芸・戯劇・生活』（邦訳名『モスクワ芸術座の回想』）を訳するなど、広くスタニスラフスキー・システムの学習をおこなっていた。

46年下半期に北平師範大学教授に就任、同年4月にゴロキー『どん底』を翻案した『夜の宿』（夜店）を演出、これがきっかけとなって中華人民共和国建国直後、北京人民芸術劇院（北京人芸）から老舍『龍鬚溝』の演出を委託された。

『龍鬚溝』上演は当時の時代状況もあって大きな成功

を取め、焦菊隱も1952年北京人芸の話劇劇団としての改組にともなって専任職の第一副院長に就任、55年には北京人芸総導演に就任した。郭沫若『虎符』（1957）、老舍『茶館』（1958）、田漢『閔漢卿』（1958）、郭沫若『蔡文姬』（1959）、曹禺他『胆剣編』（1961）、郭沫若『武則天』（1962）などの演出で注目された。焦菊隱の演出作品で現在でもその名があげられるのは『龍鬚溝』『茶館』を除くと歴史劇で、『虎符』以来の歴史劇演出が、今日の中国で話劇の民族化の探索例とされている。

1962年は、57年以来の芸術に対する政治統制がやや緩んだ年で、3月には広州で開催された全国話劇・歌劇・児童劇創作座談会に出席し、後に「演出家・作家・作品」（『導演・作家・作品』）として発表された報告を行っている。また、62、63年には自己の演劇理論を整理した論文を多数数発表した。63年には、中国戯劇家代表団の一員として、陳白塵らとともに訪日している。

これ以降は政治・思想統制が強まり、目立った活動はみられなくなった。1966年からの文化大革命では、“ブルジョア學術權威”として激しく批判され、人民日報紙上でも名指しに等しい批判を受けた。このような中で焦菊隱の健康は蝕まれ、1975年2月28日死亡した。

文革後、焦菊隱は当時の他の多くの知識人と同様名誉回復され、彼の演出による『茶館』『蔡文姬』などが再演され、極めて高い評価を受けた。彼の論文集が刊行されたのも、文革後のことである。2005年、焦菊隱生誕百年を記念し彼の論文類をほぼ網羅した『焦菊隱全集』10巻が文化芸術出版社から刊行された。

ここに訳出した「演出家・作家・作品」は、彼の演出理論を包括的に述べたもので、口頭報告をもとにしているので文章も平明である。「演出家・作家・作品」は焦菊隱の生前には正式発表されなかった。焦菊隱自身はこの論文を巻頭論文とする論文集刊行の構想をもっていたが実現せず、1979年刊行の『焦菊隱戯劇論文集』（上海文芸出版社）に収録され、始めて多くの人の目に触れた。この論文集で「演出家・作家・作品」は焦菊隱の遺志を汲んでか、事実上の巻頭論文の扱いを受けている。焦菊隱の演劇理論を知るのに最もふさわしいものと言えよう。訳出にあたっては、『焦菊隱戯劇論文集』収録テキストを底本とした。

（瀬戸宏）